

古代エジプトの高齢者問題

吉 村 作 治

〔要 旨〕 古代エジプトでも高齢者の問題は存在していた。但し高齢者の基準が違っていた。現代では65才から74才までが前期高齢者で75才以上が後期高齢者となっている。平均寿命が男女とも80才を超えているという現実からきた基準だ。それに引きかえ古代エジプトではまず寿命が男女とも30代となっている。但し王（ファラオ）は50代だ。理由は栄養の良い食事を王や王族は摂っていたからと、医者が側近にいて絶えず健康管理がされていたからである。王の中にはペピ2世の100才、ラムセス2世の92才といった現代でも長寿と言える人もいた。これらの差は遺伝子の差と思われる。だから古代エジプトの普通の人の高齢者の概念は30代と言えるだろう。この線で言うと、10才で成人扱い、20才で社会の中核で活躍し、30才で社会的には引退ということになり、古代エジプト人の人生観が見えてくる。

I. 古代エジプトの高齢者

前述のように、古代エジプトで高齢者と認定できる年代は30代後半と言える。その根拠として、J.L. Angel が地中海周辺で出土した人骨を調査した結果は以下となっている（Angel 1969: 431, table 3）。

6500 B.C.	男	34才	女	30才
5000 B.C.	男	34才	女	29才
3000 B.C.	男	36才	女	31才
2000 B.C.	男	36才	女	31才
1500 B.C.	男	39才	女	32才
1150 B.C.	男	39才	女	31才
300 B.C.	男	42才	女	37才
(15才以上の平均寿命)				

又前述したように、王の寿命は一般より長く以下のようになっている。

- (1) ペピ1世（前2300年頃）53才以上¹
- (2) ペピ2世（前2270年頃）100才？²
- (3) トトメス3世（前1500年頃）63～66才以上³
- (4) ラムセス2世（前1300年頃）
83才以上（最高で92才）⁴
- (5) プスセンネス1世（前664年頃）49才以上⁵

又現実とは合致しないが、「ウエストカーパピルス」によれば理想的な寿命は110才と記されている（Ritner 2001: 353）。それとは別に中王国時代（前2055～前1650年頃）のコフィン・テキストには以下のように記されている。「生命を理解する者は110才まで生きるであろう」と（Strouhal 1992: 254）。この読み方として、110才まで生きるというのは実際の年齢を表しているのではなく、「永遠」という意味だという意見もある。しかし100才ならともかく110才というのが中途半端感をぬぐえないので、110才という数字に意味があるのかもしれない。又アメンヘテプ3世の廷臣で、80才以上生きたと言われているハプの子アメンヘテプは理想の寿命を110才と言っていることから（Strouhal 1992: 255）、古代エジプトでは110才という寿命には特別の意味があると思われる。

古代エジプトの王朝時代では公式の戸籍が残っていないので、統計としては不正確であると前述したが、プトレマイオス朝時代においては少なくとも貴族階級の人達は生誕の日と死亡の日が公式の文書に記載されたため時代が新しくなると資料の信用性は高い（Strouhal 1992: 254）。戸籍とは異なるが、ファラオや高位の貴族の場合、生誕と死亡の記録のほかその途中の記録が残っている場合も多かった。例えばギザの大スフィンクス前にあるスフィンクス・ステラ（石碑）にはアメンヘテプ2世が建立当時18才であったと記されている（Helck

1984: 26)。当時の風習では成人が20才とされていたので、それより2年前だった同王は、「まだ才知がなかった」と記されることになる。

II. 人生観

古代エジプトの人生観は、現世で生きることは束の間であり、死後の永遠の世界へ入っていく準備期間と考えられていた。だから、現世での行為はすべてあの世とのつながりから来っていた。例えば、現世で獲得した物は全てあの世に持っていくものとし、尚且つあの世の住民、神々への土産として現世にいるうちにいろいろな物を用意した。そして一番現世で大切な事は、墓を造り、自分をミイラにすることであった。そのためにこの2つの行為のために全財産を投げ打ったのである。

ちょっと脇道にそれるが、ミイラにする目的は、遺体を腐敗処理することにより、自分の魂があつた世から現世に戻ってきた時に入る場所を作ることにあった。人間が死ぬということは、肉体と精神が分離することであると定義づけた古代エジプト人は、あの世に行った魂(バア)が一年に一回現世に戻ってきたとき、その魂を宿らせるところが自分の肉体と考えたのである。だから放っておけば腐ってしまう肉体を塩で水抜きし、乾燥した上で、ミルラという防腐剤を塗って、包帯で巻いたのである。こうすることで、あの世から帰ってきた魂がこのミイラに宿り復活・再生を図り、お参りにやってきた子孫と出会えるものとしたわけである。ミイラという言葉はこの防腐剤の名ミルラからつけられたのだ。

死は古代エジプト人にとって耐え難い苦しみであるため、死後の復活を考えた。生前良き行いをしているならば、必ず第2の生を受けるとしたのである。その際現世においてしてはならない事を決め、それを守った人のみが、復活再生できると考えた。そのため人は一度死ぬと死出の旅路を経て来世との境界に辿り着く。そこには裁判所があり、死者の生前の行いを厳しく審査するとされた。これは最後の審判と言われている。まず死者は生前してはならないことをしなかったと自ら告白しなければならぬ。これを罪の否定告白といい、多数の神々の前で声高らかに言う。その後、死後の世界の王であるオシリス神の立ち合いのもと死者はその心臓を天秤にかける。

この時片方に真理の印であるマアト女神の羽をのせ、一方に死者の心臓をのせる。この天秤が平衡を保ったら、死者は罪の否定告白において嘘を述べていないと判定される。もし、嘘が分かると、天秤の上を飛んでいる死者の魂バアはその心臓と共に、大地がわかれた底すなわち、火炎の地獄といわれている所へ落ちるのであった。こうした後、死者は審判に合格すると、アネクという永遠の生命を保つ護符をオシリス神からもらいうけ、桃源郷である来世、イアル野に入り、永遠に生き続けることができるという図式であった。故に古代エジプト人にとって、死は思考の上では嫌なことではなく、喜ぶべきこと、歓迎すべきことだったはずだ。だからこの考えを前提とするならば老齢になるということは悲しむべきことではなく死を待つ準備期間であるので一番充実した時期であった。

こうした思想はいわゆる循環型の人生観として、後世のすべての宗教の根本原理である。だが、全ての人間があつた世に行くわけではなかった。現世でやってはならないこと、すなわち罪を犯していないことがその条件であった。人を殺してはならないと言うのはもちろんのこと、嘘を言ってはならないという今ではモラルの中に入ることも罪の一つだった。最後の審判は裁判の形で行われ、ここで有罪となると死者は本当に死ぬ。これを再死と言い、あの世で復活することはできなくなった。

この考えは、後世のユダヤ教、キリスト教、イスラム教へも影響を与えていて、3つの宗教は一神教で古代エジプトの多神教すなわち自然崇拜とは違う宗旨であるが、死後の行程及び審判の趣旨・形式は同じである。

III. 高齢者の問題(1)

このように死を前向きに捉え、そのために準備を怠らない古代エジプト人も高齢になることの問題点を意識していた。まず子息が嫁を貰い家督を譲った後、自身の身の置き場がなくなり、息子や嫁からいびられる恐れがあった。古代エジプト人は高齢者を大切にす風潮が社会全体にあるとギリシアの歴史家ヘロドトスはその著「歴史」の中に書いているが、実際には舅、姑いじめは多々あったようで、それを防ぐために社会制度として「老人の杖」というのがあった(吉村 1990: 20-21)。この「老人の

杖」というのは一種の警察組織で、長い杖を持ち、「舅いじめの者はいるか」とか「姑いじめはあるか」と家々を回って確かめていたという。隣家や向いの家から「この家では親いじめが行われている」とたれこみがあれば、即座にその家に踏み込み、持っている杖で、嫁や夫をぶったのであった。それがあまりにもひどい場合は駆け込み神殿に逃げ込み、現状を訴えると、家督を継いでいてもその子が相続した土地、建物、日用品などを取り上げ、その神殿に寄進させ、生涯の面倒を神殿がみる、現代の信託制度のようなものさえあった。こうした社会の仕組みに高齢者は守られていたのである。しかしほとんどの古代エジプト人は高齢者を大切にしていた理由は、若者は高齢者に比べて太陽神ラーの光を受けている割合が少ない、すなわち経験も少なく、知識や知見も低く、人の気もわからないから一人前でないと考えられていたのである。おそらく現在の日本でこのような事を言うならば、「そんな馬鹿な、愚かな老人はたくさんいるし、賢く、経験豊かな若者もたくさんいる」と反論されてしまうと思うが、古代エジプト人ではこうした高齢者崇拜が神々の崇拜の根拠になっており社会秩序が保たれ、3000年の時を越えたものと思われる。もちろん3000年の間には下剋上の時代もあったと思われるが、そういう時代は国が乱れていてモラルも全く通じなかったであろうが、すぐに是正されたのである。

IV. 高齢者の問題（2）

高齢者の問題の中で最も重要なのは病気であるのは今も昔も地球上どこでも同じである。エジプトは古代世界でも抜群の医療国家であった。現在日本では医療費は健康保険や年金から引かれ、個人負担は外見上低くなっているが、古代エジプトでは無料であった。しかも診療科目は現在のように細分化されていた（Funn 1996：191）。眼科、歯科、胃腸科、産婦人科といった具合にである（cf. ヘロドトス『歴史』巻二、八四）。しかも医学がいかに進歩しているかを示す証拠として当時の医学に関するパピルス文書が10種類以上残っている（Funn 1996：24-41）。特に外科に関しては現在でも通用する治療法が本として残っている。高度な医療技術は王の長命を間違いなく支えていた。

王のミイラから一番よくわかる病気は虫歯である。おそらくこの延長線上で糖尿病もあったと思われる。不幸にもミイラを作る段階で、心臓を除いた臓器は全て身体から取り除かれてしまっているので、その辺りは不明であるが、外科的な手術痕などはX線やCTスキャンで明確に分かっている。こうした高レベルの医療技術にエジプト近隣の国の高位の人物や裕福な人達はエジプトに治療にやってくる。しかし外国人はその治療費はとて高いものであったようだ。国の中にはエジプトの医師を引き抜いて自国に招いたとも書かれている。

V. 死の恐怖

古代エジプト人にとっての一番の恐怖は死であった。もちろん死によって束の間の人生から解放され、永遠の生をもらえることは幸せではあったが、死後の人生の保障—あの世で永遠に生きることができるという保障—は図像や文字でしか残っていないからである。もちろん一番の保障は信ずるということであることは、古代エジプト人には分かっていた。そのため、あの世—イアル野と呼んでいた—での生活の様式を数々の図像や文字で表していたし、死後あの世への生き方や方法についてもテキストに残している。というより古代エジプトに残されている文書、ピラミッド・テキスト、コフィン・テキスト（お棺文書）、死者の書、アムドゥアトの書など全てがこのことで埋め尽くされていた。そしてしかるべき時、イアル野に行き永遠に生きるために生前使っていた生活用品や衣服、家具、アクセサリ、武具などあらゆるものを墓に入れ死後の生活で使おうとしたのである。

しかし実際のところ死に対する不安を完全に払拭することはできなかったようだ。その第一の理由は病気にかかるということであった。健康でピンピンしている者が、穏やかに死を迎えるということなら、死に対する不安はそれほどないだろう。しかし、病気で苦しみ、周囲を困らせ、挙句の果てに死に至る様子を目の当たりにしてしまうと不安は募るのが当たり前である。とはいえ古代中国の人々のように不老不死を考えたりはせず、古代エジプト人は現実の死と真正面から向き合って人生を終えていったのである。

一方、高齢者の良い面も古代エジプト人は良く理解し

ていた。高齢者は若者から尊敬を受けていたので、何か仕事をする際は、高齢者と若者がペアを組んでやっていた (cf. Brunner 1984)。そのことで技術移転がスムーズに行われ高齢者の思想が伝わるという利点もあったので、高齢者にとってはとても心地よい社会だったと思う。

VI. 文学作品にあらわれた老人像

王朝時代に著された文学にあらわれた老人像を考える前に、当時の表記文字では老人をどう書くかを見てみよう。「老いる」とは、古代エジプトでは「イアウイ」と言われている。老いた男性はイアウ、老いた女性はイアイトとなる。その例文としてエルカブ (EL KAB) にある第18王朝のパヘリの墓の碑文をしてみる (Tylor and Griffith 1894 : Pl.IX)。

(原文)



(読み)

ʕ.k pr.k
ib.k ʒw m ḥswt nt nb ntrw
krst nfrt n-ḥt iʒwi imʒh
iʒwt ii ty

(訳)

汝は、やって来て出ていく。
 汝の心は、すべての神々の祝福の中で喜んでいる。
 美しき埋葬は祝福された老人となった後にやって来る。

図1 パヘリ墓の壁画にある碑文

さて文学作品で最も有名なものとして、紀元前5世紀のギリシアの歴史家ヘロドトスとその著『歴史』に著しているエジプト人の老人に対する接し方は以下のようなものである。

「エジプト人がギリシア人と一致する風習がもうひとつある。(ただしギリシア人といっても、それはスパルタ人に限られるのであるが。) それは若い者が年長者に

道で会うと道を譲ってわきへさけ、また年長者を迎えるときには席を立つということである。しかし、どのギリシア人とも違う点もあって、それはエジプト人が路上で出会うと互いに挨拶の言葉をかわすかわりに、手を膝のあたりまで下げてお辞儀をすることである。」(ヘロドトス『歴史』、巻二、八〇)

この文章からギリシア人とエジプト人の間で老人に対する接し方がいかに違うかがわかるというものである。

次に王朝時代の文学の中でエジプト人自身は老人をどのように受けとめているかを見てみよう。

まず第5王朝末(前2400年頃)の作で、ほぼ完全な形で残されている最古の教訓文学のひとつである『宰相プタハヘテブの教訓』では以下のように書かれている(屋形, 杉 1978 : 504)。

(宰相はファラオに、老年となって体が故障だけであることを訴え、息子に自分の得た知恵を伝える許可を求め、ファラオをはこれを許す)

「・・・老いは来たり、老齡は下りたり。
 衰弱は到来し、もうろくは更新し、子供に戻りし者、
 このゆえに日々横たわりしままなり。
 視力は弱り、耳は遠くなり、
 心臓の疲れゆえに力は消え失せつつあり。
 口は沈黙して語ることもかなわず、視力は弱り、耳は遠くなり、
 心臓は日々疲れている。
 心は忘れがちにて、昨日(のこと)を思い出せず、
 骨は老年のゆえに痛み、良きことは悪しき事となり、
 すべての味覚はなくなれり。
 老年が人になすことは全て悪しき事なり。
 鼻はふさがれて呼吸することもかなわず、
 立ち上がることも座ることも大儀となれり。
 ・・・・」

次に中王国時代第12王朝(前1990年頃～前1780年頃)の初代アメンエムハト1世の死と次王センウセレット1世の即位の時期の事について書かれたシヌへの物語の中の記述である。(屋形, 杉 1978 : 410)

「・・・おお、私の体が若返ることが出来たら。
（というのも）老いがしのびより、
衰弱が私を襲っているのだ（から）。
私の目は重く、私の腕は弱い。
足は仕えることをやめ、心は疲れ切っている。
・・・」

次は『アニの教訓』の中の一節であるが、このアニという人物は18王朝初代アハメス王の後であるアハメス・ネフェルトイリの葬祭殿に勤務した。下級の書記であったので、当時の官僚の考え方や生活を知る上で重要な資料である。現存する写本はほとんどが第21王朝末（前950年頃）のもので、この教訓集は書記学校のテキストとして各年代を通じて使われていたものである。

「青年であると成年であると（を問わず）、汝の[息子]に心を配れ。職務を果たす時の長官のように振る舞うのは良くないことだ。」(屋形, 杉 1978: 543)

「・・・目標を老年にすえ、谷にある汝の場所、
(すなわち) 汝の遺骸を隠すことになる坑を飾りたてよ。
墓に憩える故老達に対すると同じように、
汝の眼が数えあげる仕事として、これを汝の前に置け。
これをなすものを非難してはならぬ。・・・(中略)

自分の死(ぬ時)は分からない(ものだからだ)。
死がやって来るとき、老年に達した者も、母親の膝の上にいる幼児も同じように連れ去るのだ・・・」
(屋形, 杉 1978: 539-540)

『アメンエムオペトの教訓』は成立時期は未確定であるが、末期王朝時代の作と言われている(屋形, 杉 1978: 546-559)。

第27章

「汝より年老いたる者を呪うな。
汝に先んじてラーを見た(者だ)からだ。
かれが昇る日輪に汝を告発することのないようにせ

よ。
「(あの) 若者は老人を呪っている」といいながら。
ラーの前にて苦痛激しきは、
老人を呪う若者である。
汝の手を胸におき、老人の打つ(がままに)しておけ。
沈黙を守り、呪う(がままに)しておけ。
(さすれば) 次の日、彼の前に赴けば、
惜しみなくパンを与えてくれよう。
犬にたべさせる主人(の務め)、
(だが) 犬は食べ物を与える主人にほえかかる。」

以上が文学にあらわれた老人に対する古代エジプト人の考え方である。これらを読んでみると、ヘロドトスが外国人としてエジプト人の風習を見て驚き、「エジプト人は老人に対して礼儀正しく、尊敬している」と述べたように、当時のエジプトの社会の基本概念が教訓文学の中でもつらぬき通されているのがわかる。

例えば『アメンエムオペトの教訓』の中では年老いたる者は自分より太陽神ラーを早く見たのだからそれだけで尊敬に値すると述べられ、もし年老いたる者を告発するなら、その行為は、太陽神ラーを告発する位罪深い事であると教えている。また老人の気まぐれや短気さに言及し、そういった場合は老人の思うようにさせて我慢すれば、翌日になれば気が変わって良くしてもらえるとさえ述べている。

また『アニの教訓』では自分の人生の目標を年老いているときに設定し、墓地を早くから作らないと死ぬ時期になって困ることになると忠告している。そして死は年に関係無く人々に訪れるのだからいつもその準備をしなければならないと説いている。一方、年老いた者から、老いることとはどういうことかという告白も出ている。『宰相プタハヘテプの教訓』にも『シヌへの物語』にも老齢になると健康状態がすぐれなく、毎日の生活に苦しみが多くなるその状態が書かれているが、これは今の時代にあてはめても変わらない。ヒポクラテス集典によると、古代エジプトにおける老人病は以下のようなものがあつたとされている。「老人においては、呼吸困難、咳を伴うカタル、尿意促迫、排尿困難、関節炎、腎臓炎、

めまい、卒中、悪液質、痒通、不眠、腹水、涙漏鼻水、視力障碍、白内障、難聴など」となっている（立川 1982:55）。もちろん当時はガンなど近代になってわかった病名はないのだが、これらを見ていると今とほぼ変わらないことがわかる。

VII. 図像資料にあらわれた老人像

前述のように古代エジプト人は来世を信じ、そのため自らの永遠の家である墓を造営することに人生を費やした。そして墓の内部には現世、来世のシーンを図像表現したのである。こうした壁面装飾として描かれたシーンから当時の生活などがより具体的にわかるわけだが、それらの中から老人が関わったシーンを取り上げて検証してみたい。老人を図像表現する場合古代エジプト人はどのような表現をしたのかを見てみると以下ようになる。

1. 頭髪についてはまず白髪を表している灰色の頭髪、そして無毛の状態、又は前頭部が無毛で後側頭部に毛髪がある状態に描く。ただし、上流階級では鬘を付けているので、必ずしもこの特徴からは決定できない。
2. 身体的特徴として腹部が突出している。その場合上半身が裸体の時腹部に3本の筋が入っている。皮下脂肪がついて、胸部がふくらんでいる。背中や肩の部分が丸くふくらんでいる。背中が湾曲している、など。
3. 持ち物では、必ず杖を持っている。これは老人を示すヒエログリフの決定詞に杖をついた人物が当てられていることから当時の老人の特徴といえよう。また形質人類学上から見ると、古代エジプトの食生活ではカルシウム等が不足しているため、骨の状態が悪く年を取ると脊椎の軟骨が硬直し、復元作用が働かなくなるために腰が曲がるということである。
4. 場面の中では、椅子に腰掛けたり、木の下で休んだり、人に手を引いてもらったり、若い人に何かを教えたりしているものが多い。

では実際のシーンを図像でみることにする（写真1、写真2）。

以上が壁画にあらわれた代表的な老人像であるが、この中からいくつかの老人の特徴を示すものを図にしてみると以下ようになる。



図2 壁画に示された老人の顔・姿の集成

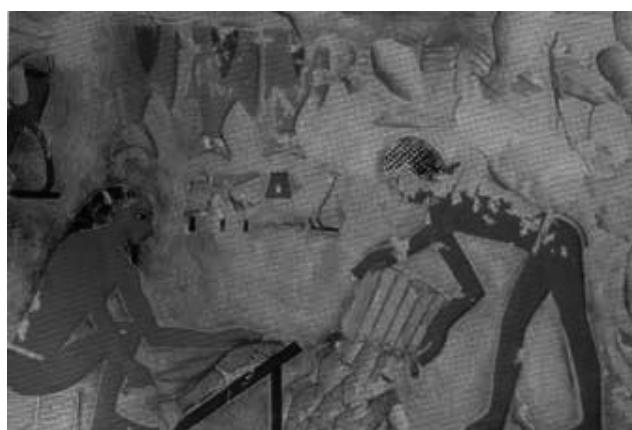
以上をまとめてみると以下ようになる。

1. 農作業のシーンでは、土を掘り起こしたり、牛に鋤を牽かせて耕作させたり、刈り入れに加わったりしている。
2. 漁労作業に於いては釣りやもりなどで突くのではなく、網を使って捕るシーンで水面をたたいたり、網を引いたり、網から魚を取り上げるところが多い。また捕った魚をひらいたり、干したりする加工の場面に老人が多い。
3. 手工業に関しては材料となるパピルスの木を船で集めたり、それを束ねたり、ロープにしたり、また亜麻布の織り機を操ったり、木製品の制作においてキャビネットに金細工の部品を象嵌したり、木棺や厨子の細部の加工をしている。また金細工師が型に金の溶けたものを注ぎ込んだり、たたいて型に切る作業のシーンに多い。
4. 官僚としては、耕地の測量、耕地の境界石の確認の仕事、測量士の先頭に立って指揮をしているシーンなどがある。
5. その他として、貴族などの世帯主は概ね老人が多く、役人や友人を接待する役をしている。

こうしたシーンに出てくる老人を大別すると、まず王や貴族として現れる場面と、王や貴族に使われている老人として現れる場面に分けられる。後者の場合、若者と組んで仕事をしていることが多い。このことは古代エジプトの社会においては技術や知識を老人が若者へ伝授し



織物を監督する年老いた女性
ベニ・ハサン クヌムヘテブ墓 (No.3)
(Newberry 1893: Pl.XXIX)



魚を調理する人
テーベ プイムラー墓 (TT39) (Sahrhage 1998)



パピルスを運ぶ人 テーベ プイムラー墓 (TT39)
(Metropolitan Museum of Art)



パピルスを束ねる人 (TT39)
テーベ プイムラー墓 (Metropolitan Museum of Art)



ブドウを摘む人々とブドウ酒を作る人々
テーベ カエムワセト墓 (TT261) (鈴木他 1983: 31)

写真1 老人が描かれた壁画の例(1)



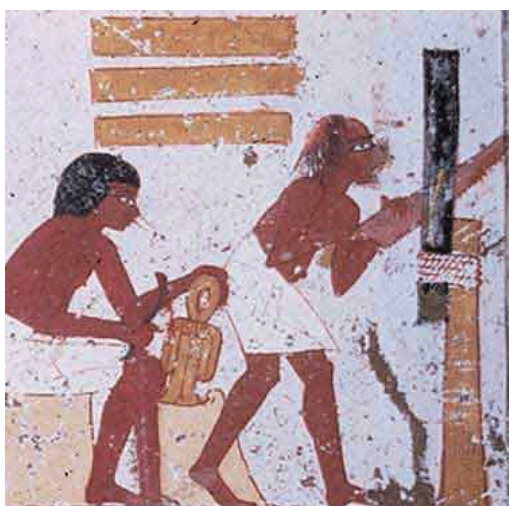
土地を耕す人々 テーベ ナクト墓 (TT52)
(写真：早稲田大学エジプト学研究所)



測量する徴税使 テーベ メンナ墓 (TT69)
(写真：早稲田大学エジプト学研究所)



刈り取った麦を集める男 テーベ メンナ墓 (TT69)
(THE OSIRISNET PROJECT)



大工仕事をする男 テーベ ネブアメン墓 (TT181)
(The Metropolitan Museum of Art)



厨子を作る男 テーベ ネブアメン墓 (TT181)
(The Metropolitan Museum of Art)

写真1 老人が描かれた壁画の例(2)

ており、それらの伝統が守られていったことを示している。

この他、彫像にも多くの老人が作られているが、その特徴は図像と同じようなものである。彫像は立体感があるためわかりやすいが、シーンを構成していないための周囲の情景が不明で、この彫像がどんな働きをしているのかをつかむことは不可能に近く老人が古代エジプトの社会で果たした役割等を考えるためには不適であるのでここでは省略する。

VIII. 小 結

古代エジプトの高齢者の諸問題を考えてきたが、物理的な年齢というより比較年齢で考えないと合点がいなかいことをご理解いただけたと思う。すなわち現在の30才は古代エジプトの時代では30才ではないのだ。平均寿命から逆算してみると、80才が40才と考えることができる。すなわち今の40才は古代エジプトの20才ということになる。確かに精神年齢でいくと合点がいく面もあるが、私はここで敢えて、物理的な年齢で高齢者を考えるのではなく、文化的側面から見ることを提唱したい。古代では栄養の面、衛生環境の面、医療の面など周囲の環境に起因して寿命が短い、人間の成熟度は現代の2倍の速さで進んでいる。その1例がアレキサンダー大王である。アレキサンダー大王は32才で亡くなっているが、その時点で世界帝国を樹立している。どうも私達現代人は医学の進歩にすがって、ただひたすら物理的な寿命を延ばすことに腐心しているように思えてならない。

長寿国世界一の日本だが、死というものを一時的に捉えるのではなく、精神、思想の継承という観点から人間の生や死を考えてみると違う答えが出てくるものと思う。これを学ばせてくれたのが古代エジプト人の来世観、いや人生観だと思う。古代エジプト人は個人の思想や哲学を一人のものにせず民族いや地域の共通のもの、共有として後世につなげた。現在ユダヤ教、キリスト教、イスラム教、仏教などの根幹となっている人の生き方は全て古代エジプトが起源となっている。高齢者の問題を古代エジプトに限らず現代日本にまで広げて考えてみると、高齢者の最大の問題は、死をどうとらえるか、いや死をどう受け入れるかを考えるかにあると考える。すなわち

高齢者である機会こそが死という来るべき時を考える時なのではないだろうか。

[参考文献]

- Angel, J. L.
1969 "The Bases of Paleodemography", *American Journal of Physical Anthropology* 30:3, pp.427-437.
- Brunner, H.
1984 "Stab des Alters", *Lexikon der Ägyptologie*, band V, p.1224.
- Funn J. F.
1996 *Ancient Egyptian Medicine*, British Museum Press, London.
- Helck, W.
1984 *Urkunden des ägyptischen Altertums: Urkunden der 18. Dynastie*, Akademie-Verlag, Berlin.
- Henige, D.
2009 "How long did Pepy II reign?", *Göttinger Miszellen*: 221, 41-48.
- Jansen-Winkel, K.
2006 "Dynasty 21", *Ancient Egyptian Chronology*, Brill, Leiden and Boston, pp.218-233.
- Leclan, J.
2001a "Pepy I", in Redford, D. B. (ed.), *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt*, vol. 3, Oxford University Press, Oxford and New York, pp. 33-34.
2001b "Pepy II", in Redford, D. B. (ed.), *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt*, vol. 3, Oxford University Press, Oxford and New York, pp. 34-35.

- Newberry, P. E.
1893 *Beni Hasan I*, Kegan Paul, Trench, Trübner & Co., Ltd., London.
- Ritner, R. K.
2001 "Medicine", in Redford, D. B. (ed.), *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt*, vol. 2, Oxford University Press, Oxford and New York, pp. 353-356.
- Sahrhage, D.
1998 *Fischfang und Fischkult im Alten Ägypten*, von Zabern, Mainz.
- Shaw, I. (ed.)
2000 *The Oxford History of Ancient Egypt*, Oxford University Press, Oxford and New York.
- Strouhal, E.
1992 *Life in Ancient Egypt*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Tylor J. J. and Griffith, F. L.
1894 *The tomb of Paheri at El kab*, The Egypt Exploration Fund, London.
- Wente, E. F.
1980 "Age at Death of Pharaohs of the New Kingdom, Determined from Historical Sources", in Harris, J. E. and Wente, E. F. (eds.), *An X-ray Atlas of the Royal Mummies*, The University of Chicago Press, Chicago and London, pp.234-285.
- 鈴木八司 他
1983『岩波グラフィックス 古代エジプトへの旅』、岩波書店.
- 立川 昭二
1982『歴史紀行 死の風景』、朝日新聞社出版局.
- ヘロドトス (松平千秋訳)
1971『歴史』上巻、岩波書店.
- 屋形禎亮、杉勇 (訳)
1978「エジプト」『筑摩世界文学大系1 古代オリエント集』、筑摩書房、pp.401-656.
- 吉村作治
1990「古代エジプトの老齡者に関する一考察」、吉村作治・店田廣文 (編)『エジプトの高齡者—古代と現代—』、早稲田大学人間総合研究センター流動化社会と生活の質プロジェクト、pp.3-23.
- Metropolitan Museum of Art
1. "Men Splitting Papyrus, Tomb of Puyemre"
<http://www.metmuseum.org/collection/the-collection-online/search/544592>
(2015年9月29日閲覧)
2. "Men Gathering Papyrus, Tomb of Puyemre"
<http://www.metmuseum.org/collection/the-collection-online/search/544591>
(2015年9月29日閲覧)
3. "Craftsmen, Tomb of Nebamun and Ipuky"
<http://www.metmuseum.org/collection/the-collection-online/search/548568>
(2015年9月29日閲覧)
- THE OSIRISNET PROJECT
"TT69 Menna"
http://www.osirisnet.net/tombes/nobles/menna69/e_menna_01.htm
(2015年9月29日閲覧)

[脚注]

- 1 ペピ1世の治世は記録から50~53年続いたと言われている (Leclan 2001a)。即位した年齢が不明なため、53年以上とした。
- 2 ペピ2世の治世は100才まで続いたと考えられていたが、その説に対して疑問を投げかける意見も見られる (Leclan 2001b: 35; Henige 2009)。

- 3 Wente 1980を参照。
- 4 Wente 1980を参照。
- 5 プスセンネス1世の没年に関しては、治世49年の記録が残っているが (Jansen-Winkel 2006: 227)、即位した際の年齢が不明なため、没年は49才以上とした。
- 6 年代についてはThe Oxford History of Ancient Egyptを参照した (Shaw 2000 : 479-483)。

The problem of aging population in Ancient Egyptian society

Sakuji Yoshimura

Abstract

Ancient Egyptian society had the problem of aging population. However the criteria for the aged person were different from the modern society. Young-old are 65 to 74 years old and old-old are over 75 in the modern world. These criteria are based on the aging society whom average length of life was more than 80 years old. On the other hand, the average life-span of ancient Egyptians was their 30s. Life-span of kings (Pharaohs) was 50s, because kings and their families usually had more nutritious meal and king's health was monitored by his or her personal doctor. Some kings lived very long life, even in modern point of view, for example Pepy II died at age 100 and Ramses II at 92. This distinction of life-span may be derived from the difference between genes of the modern and ancient people. It is possible that in ancient Egyptian society the age of person who was labeled as "the elderly" was from 30s. Teenagers were accepted as an adult, 20s played a pivotal role in the society and 30s retired from public life. These stages of life were closely related to the ancient Egyptian concept of their life.